

仏教と女性

——インド文献を通じて——

田上 太 秀

本日お話しする仏教と女性というテーマは仏教文献に見られる女性差別の問題を取り上げるものであります。

私はインド仏教を中心に研究しておりますが、この女性の人權に関する問題を意識し始めたのは、かつて『婦人公論』という雑誌を読んでおりましたところ、そこに寺院における寺族、あるいは坊守が差別を受けていることを取り上げた座談会の記事が掲載されており、興味を持ったことが最初であります。その中で真宗寺院の出身の女性学者がその実情を紹介していたのに驚きました。

私はそれまで寺院で、それ程女性が差別されているとは思っていませんでした。その差別の源流はインドの仏教にあると彼女は指摘していました。これが大きなショックでした。これは私自身の不勉強を暴露することになるのです。

それまでインド仏教文献を数多く読んできましたが、いわゆる女人五障説や、変成男子説などについては、実のところまったく無知でありました。そこで一念発起してという大袈裟ですが、これらの問題がどれ程根深いものかを知るために、二、三の先輩の学者の研究論文や著書を頼りに研究を始めました。研究が進むにつれて女性差別

の内容が仏典にいかにかを知らされました。

研究論文を研究雑誌に発表したり、一般雑誌にも連載で書いたりしました。徐々にこの問題が注目を浴びるようになり、「仏教と女性」という共同テーマで日本仏教学会が開催され、ここでも駒澤大学を代表して発表をしました。さらに『仏教と性差別、インド仏典を通して』（のちに『仏教と女性』と改題して再版）という著書も出版しました。現在では女性の研究者が増え、仏教へのきびしい批判を浴びせられる方々がおられて、研究が盛んになってきたことは喜ばしいことと受け止めています。

さて、本題に入ります前に誤解を招かないためにも、経典の特色について少し説明をさせていただきます。

経典の特色について

経典は大きく二つに分類されます。一つは編纂された経典群と、もう一つは創作された経典群があります。

編纂された経典群は紀元前にまとめられた経典群を言い、創作された経典群は紀元後に作られた経典群を言います。

釈迦が各地を遊行した先で説法した教えを弟子たちが聴き、それを記憶しておりました。当時は筆記することがなく、みな記憶して教えを保存したのです。その記憶した教えを釈迦の死後、五、六十日後、また百年後、二百年後などに持ち寄って編纂したのです。もちろん最初期の編纂経典は釈迦の言葉が正しく編纂されたものと考えられます。

しかし段々年月が経つと記憶した内容を弟子が弟子に伝えるうちに、最初の経典の内容のまままで伝えられてきた

とは考えにくいのです。正確に伝えられた部分は多いと思いますが、なかには弟子によって間違った記憶を伝えている場合もあったでしょうし、また本来なかった言葉を付加している部分もなかったとは言えません。

とにかく釈迦の死後は記憶した内容を編纂した経典が成立しました。これがいわゆる「阿含経」です。そして紀元前中頃に文字に書き表される作業が行なわれ、記憶されてきた経典が目に見える形で、だれでも読める形で経典が編纂されたのです。これがパーリ語聖典とよばれる経典群です。これらの経典群を編纂経典と呼ぶことにします。

次にこれら編纂経典群を読み、新たな仏教の世界観や人生観を展開した仏教を立ち上げ、革新的な仏教を広めた仏教徒たちがいました。この仏教を一般に大乘仏教と呼んでいます。この大乘仏教徒たちの間で数多くの経典が作られました。彼らは「阿含経」を読んで、その内容を敷衍して、新たな仏教思想を唱道したのです。その運動を基にして新たな経典を作り、それを人々に説き示しながら、教化活動をしました。

それらの経典はいかにも釈迦の説法を直かに聞いたかのように書かれ、ドラマティックに構成された経典です。大乘仏教経典の内容は一樣でなく、さまざまな世界観や人生観にあふれ、これらは釈迦が実際に説いていたのかと疑うようなものです。「阿含経」にまったく書かれていないような内容が数多く説かれているのです。

さらに驚くことは大乘仏教経典はだれが、いつ、どこで作ったのか、まったく不明です。各経典に著者名が明記されていません。みな釈迦が説法したという前提で作られたのです。さらによくはないことは、これを中国で漢訳するとき翻訳者たちは経典の題名の上に「仏説」という冠を付けました。これが権威付けとなったのです。この冠がついたままわが国にもたらされたので、わが国の人々はこれらがみな釈迦の教えであると信じぎってしまう結果になりました。

面白いことは仏典の中で最古の經典である『法句經』の漢訳には「仏説」の冠がありません。この經典こそ釈迦の真正正銘の教えを記録してあるのに、それに「仏説」の冠がなく、後の創作經典に冠があるというのは偽表示をした商品のラベルに似ていませんか。

わが国の寺院で読まれているすべての經典がこの創作經典です。

このように經典は編纂經典と創作經典に分類されますが、ここで問題となる女人五障や变成男子の思想をこれらの經典との関わりで考慮しなければなりません。

衆縁和合説と五蘊説

もう一つ女性の問題を考える上で注目しておかなければならないことは、釈迦の世界観と人間観です。

釈迦は世間は衆縁和合して生滅していると説きました。つまりさまざまな原因と条件（衆縁）が集合し、依存し、相関し、調和して（和合）生じては滅していると説きました。世間は「寄り合い」「縁り合い」「縁り合い」の場であると見たのです。

このように世間を観察する目で我が身を觀察すると、この身体は五蘊、すなわち色受想行識の五つのものから構成されていると見たのです。ここには靈魂や神が宿っていないのです。身体は単なる五つの集まりにすぎない。これが調和を保っている間は健康であるが、不調和であると病であると言います。バランスが徐々にとれなくなっていくことが老いというのです。まったくはたらきがなくなるときに死を迎え、死後は五つの集まりは分散して最初の無に帰すのです。

女性も男性も身体の上で言えば五つの集まりにすぎません。病もあり、老いもあり、死もあります。ここに女性と男性の違いはありません。

また五つの集まりから煩惱が生まれます。むさぼりや怒りや憎みや妬みや驕りもなどの煩惱は男女に区別なく生じます。殺しや盗みや不倫も男女にかかわらず行ないます。妄語も男も女も口にします。五つの集まりからできた身体から生じるさまざま煩悩は男女に違いはありません。女が多くて男が少ないということもありません。

釈迦は男女の違いは形の違いであつて、身体の構成要素、心の在り方では取り立てて差別するような違いは見られないと説いたのです。

性差別は最初にあつたか

いよいよ本題に入ります。右ののべたことを念頭に置いて性差別の問題を考えていただきたいのですが、まず、原始仏教經典に釈迦の言葉として次のような例があります。

女性は男を求め、女心はアクセサリーや化粧品に向き、わが子を頼りとし、

夫を独占しようとし、すべての支配権を握ろうと謀っている。

女性は怒りつぽく、嫉妬深く、愚痴る性質がある。

『増支部經典』第三卷

『増支部經典』第一卷

こんなことを釈迦はのべたとありますが、私が釈迦の説法した内容を理解した限りではどうしてこんな言葉を釈

迦が発したとは考えられません。この『増支部経典』は原始仏教経典の成立年代では新しい層にあり、潤色した内容があったり、挿入や付加した内容のものがあったりしていると考えられています。したがって右に紹介したのも恐らくはだれかが挿入したと考えられます。

ここに挙げた例だけでなく、女性蔑視や差別した内容が釈迦の言説であるかのように記されている例は少なくありませんが、はたしてそれらが釈迦自身の言葉であったかどうか疑わしいのです。と言いますのは、釈迦は女性がさとりを得る上で男性と比べて障害になるものはないとつねにのべていることです。その事実は長老尼（高德で人格優れた尼僧）たちの間では修行の上では男女平等で、女だから男よりさとのが遅いとか、女身であるからブツダになれないとかのべていません。男女の違いはないと堂々と発言しているのです。

仏典に『テーラ・ガーター』、『テーリー・ガーター』があります。前者は長老たちの回顧録、後者は長老尼たちの回顧録です。いずれも阿羅漢のさとりを得た出家者たちです。

阿羅漢とは最高の聖者のことを言い、さとりの境地はブツダと同じです。初期の仏教教団では阿羅漢とブツダとは同じさとりの境地を得た者への呼称でしたが、弟子たちの間で釈迦をブツダと、弟子たち自身を阿羅漢と呼称する、いわゆる師弟の間を呼称で違いを表そうとしたのです。しかし釈迦は弟子たちの中で阿羅漢のさとりを得た者たちには「ブツダたちよ」と呼び掛けていたことが知られます。

さて、『テーリー・ガーター』を読みますと、長老尼たちの間では釈迦は男女の違いを感じさせるような説法を聞いていないとのべています。なかでもソーマという長老尼は「心がよく安定し、智慧が現に生じているときに、正しく真理を観察する者にとつて、女であることが妨げとなることはない」とのべているのです。彼女の言葉は『長部経典』の中にも記録されています。これは女人五障説や変成男子説への反論です。

注意すべき点は、先に述べたように右の經典類は長老たちによって編纂されたのですが、ここにソーマ長老尼のような発言を記録し、まとめていたという事実は良識ある長老たちの間では女人五障説や変成男子説は釈迦の説法にはなかつたことを示したものと考えられます。

原始仏教教団の中では釈迦をはじめ、修行者の間では女性蔑視、女性差別などはなかつたと考えられます。

釈迦が女性を差別していなかつた事実を見ることができます。それは説法の中で釈迦は両親を「母父」、原語でマター・ピトリと呼んでいたのです。わが国では父母と呼ぶのが一般的ですが、釈迦はつねに母を先においたのです。

仏教經典の原典、それはパーリ語・サンスクリット語の原語で表された原典では例外なく「母父」となっています。その理由として釈迦がアーリア文化での家父長制度に対して母系制家族倫理を説こうとしたことであつたのではと考えられています。

母を中心とした家族の在り方をよく説法していったのです。従来の家族はつねに父を中心としており、言葉の上でも父の原語ピトリの一語で先祖、両親、父の三つの使い分けをしています。ところが釈迦は母の存在を面に出して、家庭では母が中心であるかのように教えようとしたのです。

釈迦は「母は家族の友」とのべました。友とは力となる人、力を貸してくれる人という意味です。友の原語ミトラの語源は慈悲の慈の原語マイトリの語源と同じです。いずれも力をくれるもの、助力するものという意味です。つまり母は友であり、慈悲の権現であるという意味も含まれているのです。

わが国では父母となつたのはなぜかと言いますと、実はインドの經典が中国で漢訳される段階で母父を父母と翻訳されたものが、そのままわが国にもたらされたからです。間違つた訳が伝えられ、これが釈迦の教えと考えたの

です。すでにのべた「仏説」と同じです。

江戸中期の富永仲基という国学者が『出定後語』という著書で、この間違いを指摘していますが、わが国の僧侶も仏教学者もだれもこの指摘に耳を貸さず、今日まで「父母」で通しています。釈迦の教えが捨てられているのです。

女性の人権を高めた事件があります。それは釈迦が女性の出家を認めたことです。修行する女性はいたようですが、出家した女性はそれまでいませんでした。出家するとは家を捨て、家族を捨て、社会生活との決別であります。女性が出家することは未婚であれば親を捨て、家を捨てることです。既婚の女性は家庭を捨てることです。とくに既婚女性の出家は現実には皆無に等しいのですが、未婚女性の出家は少なくありませんでした。虐待を受けた女性が社会や家族の桎梏から解放されたいために出家する例が多かったようです。

女性の出家を許可したきっかけは、釈迦の育ての親の老後を気遣って出家の道を選ばせたことにあると考えます。その経緯については省きますが、これは多くの男性出家者たちに歓迎されたとは考えにくいです。これを境に仏教団にさまざまな問題が起こったことは事実です。そしてこれがおそらく女性差別を際立たせた女人五障説や変成男子説を生んだのであらうとも推測できます。

それは偏見と差別の意識を持つ男性出家者たちの、いわゆる良識のない男性たちのたくらみから始まったと考えられますが、釈迦自身は女性を男性と平等に生活ができる環境を作りたいという願いから始めたと考えます。女性が男性と真理について論じ合い、説法を肩を並べて聞ける機会を作り、同じようにさとりに向けて努力できる、そんな共同体を作りたかったと言えます。

女人五障説の矛盾

ところがこの釈迦の思いとは反対に、釈迦の死後、弟子の間では女性への差別発言が經典に躍るようになりました。その代表的な発言がいわゆる女人五障説です。

女性が阿羅漢・正等覺者、轉輪王、帝釈天、魔王、梵天になることは道理になく、あつてはならないことである。

この例文は原始仏教の『中部經典』や『長部經典』などの二、三か所にあるだけですが、漢訳文にあつても、原文になかったり、その反対であつたりなどばらつきが見られます。つまりこの文例はおそらく統一した考えではなかったものと考えられ、だれかの挿入と推測されます。

引用文の波線はさとりを得た聖者の意味で、轉輪王は国家の統治者の意味です。いずれも人間です。後の三つは神に属するもので、人間ではありません。女性はこれら五つものになれないと言いますが、神になれないというのは男性もなれないので女性だけに限りません。しかし阿羅漢・正等覺者と轉輪聖王になれないというのは問題です。実は古代インドでは轉輪王になつた女性が複数います。また、釈迦は男女別なくブツダになれると説法しています。したがつて右の引用文のような発言を釈迦自身がのべたとはどうも考えられません。

原始仏教經典の中でも、釈迦の説法を忠実に近い形で編纂した經典の数々を読む限りでは、この女人五障を説いた例も、それに近い説法をした箇所をまったく発見することはできません。女人五障説が定説のように現れたのは紀元前二世紀ころといわれますが、いかにも釈迦の説のようはこの部分がひとり歩きして、紀元後の創作經典の

中にちりばめられたのです。

経典の中に女人五障説を読んだ男僧たちの間には、おそらく仏説とは信じがたいと考えた者がいたのでしょうか、それでもこの説は消えませんでした。

ブツダの特徴

これを裏付けるような説がまた現れたのです。それは周知の如来三十二相です。ブツダには凡人とは異なった、生来、特別な人相と体の特徴が三十二種あるという考えです。これらの特徴を見ると、みな男性の特徴なのです。ブツダになるためにはこの男性の特徴を持っていなくてはならないというわけです。

さらにこれに付属の特徴を八十種も加えて、三十二相八十種好相という特徴をブツダはもっているという説を作り上げてしまいました。これで見ると、女性がブツダになることは不可能だという証拠を突き付けたことになりました。

ここまできますと、女性がブツダになる機会も可能性もまったくなくなってしまうと、となりますと、すべての人が男女の別なくブツダになれるという釈迦の教えは空念仏になつてしまいます。良識ある？ 仏教徒は、これは単に男性のための教えにすぎないという、偏つて信仰を説く宗教と受け止められることを危惧したのか、女性がブツダになれる条件を作らなければならぬというところから、変成男子説が考え出されたのではないかと思えます。つまり男に生まれ変わることで女性もブツダになれるというわけです。

変成男子の意味

変成男子の意味を考えてみますと、いろいろと解釈されます。例えば来世で男性として生まれ変わってくるという意味なのか、現世で性転換するという意味なのか、それとも男性の姿に変身することなのか、などが考えられます。編纂経典では変成男子に関する記述は少ないのですが、大乘仏教の経典では多くは男性の姿に変身することを変成男子と言っているようです。男性の身なりをすることです。具体的には頭を剃って、袈裟を着た出家者の姿になることです。考えてみると、これならば何も改まって出家しろと言わなくてもいいのです。すでに原始仏教教団で女性が出家していたわけですから、女人は五障があるためにブツダにならないが、変成男子すればブツダになれるという、とんでもない回り道をした言い方をしなくてもよかったです。

ところが男僧たちは出家の身になるだけでは十分とはみなかったでしょう。すでに原始仏教の経典の中に出家したら「女心を捨てて男心を做う」ことを要請しました。男心は清らかで正直であるから、という理由をもって、女性の出家者たちを教育したように書かれています。これは大乘仏教の経典の中にも受け継がれています。

大乘仏教の多くの創作経典に変成男子説があふれていて、教義の説明でも変成男子説の正統性を説いています。例えば中国や朝鮮や日本などの仏教思想の核となっている仏性思想の原典である『涅槃経』は、仏性は丈夫相つまり男性の特徴を持つと説いたのです。そこでは女性も等しく仏性を持っているが、女身である間は仏性の有無をまったく知らないというのです。だからもし仏性を求め、ブツダになったら男性の特徴を持つことだと説きました。もし女性が仏性が我が身にあることに気付いたら、その時、彼女はすでに男性となっているともいうのです。

もう一つの例をあげますと、仏教では修行のはじめは菩提心（さとりを求めるころ）にあると説きますが、この菩提心を重視し、これを起こすことを強調します。だれでもこの心を起こさないと、ブツダになることはできないとも説いています。ところがこれは女性には条件付きで説かれています。女性が菩提心を起こすときは、それは男性になることを求めるためであり、さとりを求める行為ではないというのです。

ほかにもいろいろの場面で変成男子が女性に求められています。共通して女性は女身のままではブツダにはなれないと大乘仏教では説かれています。これが中国、朝鮮、日本の仏教では、定説となっているのです。わが国の宗祖といわれる人たちの頭にもこれは仏説として信じられていることは確かです。

女人成仏と女身不成仏

一般に仏教学者や僧侶は仏教は男女平等を説いていると発言していますが、確かに総論としていえば正しいのです。すでにのべたように釈迦は男女の別なく覺りを得ることができ、ブツダになれると説きました。この教えは仏教の基本的な教えであり定説です。これを弟子たちが忠実に説き、正しく伝えてきたのであれば、女人五障説も変成男子説も生まれなかったのです。

もし釈迦がこれら二つの説を説いたのであれば、あの『法句経』の教えなどだれも見向きもしなかったであろうし、万民共通の普遍的教えとして今日まで伝わって来なかったでしょう。

仏教は本来女人成仏を説いてきたのであり、これが仏説であることを知るべきです。

しかし大乘仏教の創作経典が「仏説」の冠を付けて、ここに女身では成仏できないという似非仏説を広めたことで、

これがわが国でも真の仏説であると信じられたのです。

釈迦は女人成仏を説きましたが、釈迦の死後の弟子たちによって女身不成仏という信仰が仏説として説かれ、その女身を変成男子することで始めて成仏が可能になるという条件を付して女人成仏を説いたのです。大乘仏教の仏典では女人と女身の用語の違いをはつきり区別して使っていることを読み取ることが大切です。

ご清聴ありがとうございました。

（二〇〇七年十一月九日、仏教文学研究所定例講演会での講演に加筆したものです。）